

三世輪マンダラの構造と特色

宮 坂 宥 峻

0、はじめに

『初会金剛頂経』¹を構成している四大品には、大・三昧耶・法・羯磨・四印・一印に対応する六種のマンダラが説かれている。しかし降三世品のみ、更に四種のマンダラを加えて説いている。

この四種のマンダラの名称は、儀軌題によれば「三世輪大マンダラ」「一切金剛部金剛マンダラ」「一切金剛部法三昧耶マンダラ」「一切金剛部羯磨マンダラ」である。『金剛頂経瑜伽十八会指帰』²（『十八会指帰』）では「教勅」と言われる。本稿では他の四大品に倣って、大マンダラの名称からこの四種のマンダラを「三世輪」と統一することにする。

三世輪マンダラの作例はチベット白居寺の第五層にあるもののみが報告されている³。この作例は Ānandagarbha の “*Tattvālokaṅkāra*”⁴に基づいて画かれたものである。

三世輪マンダラは、形状やマンダラを構成する諸尊などが、『初会金剛頂経』の性格上、極めて特異な性質を有している。本稿では、この三世輪四種のマンダラの構造や特色について考察し、『初会金剛頂経』理解の一つとしたい。

1、降三世品 三世輪大曼荼羅儀軌の概要

まずは降三世品の構成について確認しておきたい。四大品の中で降三世品⁵のみの十種のマンダラを説いているが、それを一覧すると次の通りである。

- (1) 降三世大マンダラ (Trilokavijayamahāmaṇḍala)
- (2) 忿怒秘密印マンダラ (Krodhaguhyamudrāmaṇḍala)
- (3) 金剛部法智三昧耶マンダラ (Vajrakuladharmajñānasamayamaṇḍala)
- (4) 金剛部羯磨マンダラ (Vajrakulakarmamaṇḍala)

- (5) 降三世四印マンダラ⁶ (Trilokavijayacaturmudrāmaṇḍala)
- (6) 秘密マンダラ⁷ (Guhyamaṇḍala)
- (7) 三世輪大マンダラ (Trilokacakramahāmaṇḍala)
- (8) 一切金剛部金剛マンダラ (Sarvavajrakulavajramaṇḍala)
- (9) 一切金剛部法三昧耶マンダラ
(Sarvavajrakuladharmasamayamaṇḍala)
- (10) 一切金剛部羯磨マンダラ (Sarvavajrakulakarmamaṇḍala)

先に記したように(1)～(6)は他の四大品と同様に、大・三昧耶・法・羯磨・四印・一印に対応したマンダラである。また(1)と(2)は真言宗で用いられる金剛界九会曼荼羅中の降三世会と降三世三昧耶会の基となっているマンダラであるが、(3)以降のマンダラは日本に伝承されていない。

本稿で取り上げる三世輪は(7)～(10)のマンダラである。そこでまずは全体の概要を抑えるために『十八会指帰』の記述から見ていきたい⁸。

次説降三世大品。有六曼荼羅

(中略)

次為外金剛部衆。説四種曼荼羅。各説本真言本印契献仏。

仏為説教勅大曼荼羅。具三十七。説引入弟子儀。説為弟子使役外金剛部軌則。此中説大仏頂及光聚仏頂真言及契。亦通一字頂輪法

次説第二教勅三昧耶曼荼羅。彼諸天后等。各献本真言。仏為説曼荼羅。具三十七。説為弟子説修業叉業叉女法。広説諸儀軌

次第三説教勅法曼荼羅。諸天説眞言献。仏為彼等説曼荼羅。具三十七。説引入弟子儀。為弟子説諸天之法印已。由此印不違越本誓

次第四説教勅羯磨曼荼羅。具三十七。説引入弟子儀。彼等諸天。各説本真言。仏為説曼荼羅。説諸天舞儀。説成就諸事業速疾法。

まず注目すべきは、『十八会指帰』において「次説降三世大品。有六曼荼羅」と記されていることである。さらに「為外金剛部衆。説四種曼荼羅。」とあることから、(7)～(10)の三世輪マンダラは降三世品の内に含まないとするのが『十八会指帰』の解釈である。尤も原本をみる限りでは、(1)～(10)すべてが同じ章である⁹。

次にマンダラの名称であるが、いずれも「教勅」とあり、四印（大・三昧耶・法・羯磨）に対応したマンダラであるとしている。

尊格数についてはすべて「具三十七」とあるが、後に検討するように三十七尊となるかは不確かである。少なくともチベットの作例では三十七尊を大きく上回る尊格が画かれている。

次に実際の儀軌の内容を見ていく。三世輪大曼荼羅儀軌の内容を簡条すると次の通りである。

●最勝曼荼羅王の三摩地

- (一) 大自在天の降伏 蘇生 【§ 1206～§ 1212】
- (二) 举足 月足一切如来菩提心印 【§ 1213～§ 1219】
- (三) 大自在天に金剛最上明灌頂を授く 【§ 1220～§ 1222】
- (四) 如来仏頂 【§ 1223～§ 1227】
- (五) 菩薩の真言（六尊）
 - ・金剛手 【§ 1228】
 - ・金剛手 【§ 1229】
 - ・金剛蔵 【§ 1230】
 - ・金剛眼 【§ 1231】
 - ・金剛巧業 【§ 1232】
 - ・金剛最上明 【§ 1233】
- (六) 五類天衆の真言（二十一尊）
 - ・明王 【§ 1234～§ 1238】
 - ・忿怒主 【§ 1239～§ 1243】
 - ・譏那主 【§ 1244～§ 1247】
 - ・拏多主 【§ 1248～§ 1251】
 - ・際咤 【§ 1252～§ 1256】
- (七) 四摂の真言 【§ 1257～§ 1260】

●図絵入壇

- (八) 図絵 【§ 1261～§ 1290】
- (九) 灌頂儀礼 【§ 1291～§ 1303】

●悉地智

- (十) 大印縛 【§ 1304～§ 1321】

(十一) 印功德 【§ 1322～§ 1330】

この儀軌は(1)降三世大曼荼羅儀軌における「大自在天の降伏」¹⁰を終え、大自在天がまさに金剛手の足から解放される場面を再説するところから始まる。

絶命している大自在天に対して蘇生の印と真言が明かされ、「灰自在声 (Bhasmeśvaranirghoṣa) 如来」が大自在天の身体に入ることによって蘇生される。

蘇生した大自在天は「金剛最上明」として灌頂されて菩薩になる。降三世大曼荼羅儀軌においても大自在天は灌頂されているが、その時は「忿怒金剛」として灌頂され明王となっている¹¹。同じ降三世品であるが、大自在天が異なる灌頂を授かることなどからも、全く同じ内容が再説されているわけではないことが理解される。

次に大自在天を降伏し灌頂したことによって、金剛手に如来仏頂としての性質が加わる。最後に諸菩薩・五類天衆・四摂菩薩が真言を明かし、図絵入壇と移っていく。

この真言の列挙のうち最初の(五)菩薩の真言について、他の四大品と異なり、世尊が真言を説かず、代りに金剛手が二度、真言 (svavidyā と hrdaya) を説いている。このことについては後に検討する。

(六)の五類天衆とは、降三世大曼荼羅儀軌において降伏され灌頂を受けた諸天のことである。ただし原名ではなく、灌頂名によって真言を明かしていく。また明王の最初に「忿怒金剛」が真言を明かしているが、先に記したように忿怒金剛とは降三世大曼荼羅儀軌における大自在天のことである。しかしながら(五)菩薩の中に同じく大自在天である金剛最上明菩薩が真言を説いている。そのため大自在天が重複している。尤も両者とも「金剛手の足元に礼拝しつつ真言を明かす」とあり¹²、同一の尊格ではないかと推測される。

以上、簡略ではあるが造壇までの概要である。大マンドラではこれらを以て図絵されていく。

そもそも「三世輪」の「三世」とは、大自在天を始めとする諸天のことである¹³。大自在天を降伏することから「降三世」というが、この儀軌では諸天が展開していくことから「三世輪」というのであろう。

2、三世輪マンダラの構造

(1-1) 大マンダラの形状

次に本題である三世輪四種のマンダラの構造について順次見ていく。大マンダラの構造については拙稿『智山学報』63輯に記しているが¹⁴、改め見ていきたい。

まず大マンダラの形状における経典の記述は次の通りである。猶、真言は省略する。【§ 1261～§ 1271】

その時、金剛手は以下の一切金剛部の大マンダラ
[sarvavajrakulamahāmaṇḍala] を説いた。

次に私は最上の大マンダラを説こう。
法輪 [dharmacakra] のようにすべてのマンダラを線引きせよ。

そこで、以下の線引きの心真言がある。
[金剛糸の真言]

マンダラの中央にカディラ樹の橛を打ち、そこに（樹の）二倍
[dviguṇa] の糸を作り¹⁵、それによって線引きせよ。

そこで、以下の橛の心真言がある。
[金剛橛の真言]

四本の線を結び、円輪を線引きせよ。その外側に出でて、同様に二倍
[dviguṇa] に（線引きせよ）。

また、その三倍 [triguṇa] にて外輪の線を引け。隅の方は輻 [ara] の用法で角 [koṇa] を線引きせよ。

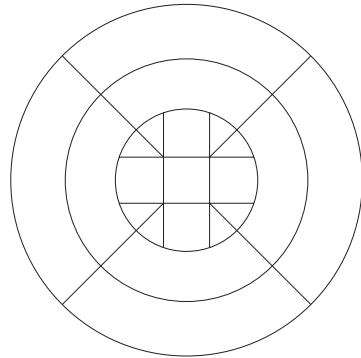
以上が抔線の儀軌である。

次に線を清浄な色粉で満たせ。規則通り左手の金剛大拳によって東の線を（引け）。

次に適宜（せよ）。

そこで、以下の色染の心真言がある。
[金剛色粉の真言]

次に中央に住する金剛阿闍梨は専心して、金剛の四門をまさに意に



よって開け。

そこで、以下の開門の心真言がある。〔開門の真言〕

まず以て、四大品の中で墨打法が説かれているのは降三世品の曼荼羅儀軌のみである。

灌頂段や儀軌の名称には「三世輪大マンダラ」とあるが、造壇における大マンダラの名称は「一切金剛部の大マンダラ」とある。

形状については、「法輪のように」とあることから円形であり、さらに「二倍」と「三倍」にて線を引くことから、三重同心円形であることが理解される。また、「輻」とあるように輻輪であり、「角」の解釈にもよるが、四輻輪マンダラであると解釈される。作例も四輻輪の三重円形をとっている。右上の図はこれらを基に試画したものである。

(1-2) 大マンダラの諸尊

次に大マンダラの諸尊について見ていきたい。諸尊についての記述は次の通りである。【§ 1272～§ 1290】

金、銀、或いは彩色した土製の四角の祭壇に仏の影像を入れるべきである。

そこで、以下の一切仏の心真言がある。

〔om sarvavit.〕

仏の一切所に四大薩埵をなせ。金剛手は降三世をなしつつ、東に住する。〔金剛手・金剛蔵・金剛眼・金剛巧業の真言〕

注意深く線の方から入り、あるいは出るべきである。

金剛歩というこれによって線を越えるべきである。

そこで、以下の金剛歩の心真言がある。〔金剛歩の真言〕

同様に金剛歩によって最初のマンダラに至り、金剛幻化等（の明王）を次第に適宜、画け。

そこで、以下の三昧耶心真言がある。〔金剛幻化・金剛鈴・寂默金剛・金剛器杖の真言〕

同様に金剛歩によって第二のマンダラに至り、金剛軍荼利を始めとする金剛忿怒を入れよ。

そこで、以下の心真言がある。〔金剛軍荼利・金剛光・金剛杖・金剛氷誑羅の真言〕

次に金剛歩によって四門に金剛舜拏等すべて（の誑那主）を次第に適宜、画け。

そこで、以下の三昧耶心真言がある。〔金剛舜拏・金剛鬘・金剛敬愛・最勝金剛の真言〕

金剛歩によって第三のマンダラに至り、金剛穆娑羅等（の拏多主）を次第に適宜、画け。

そこで、以下の心真言がある。〔金剛穆娑羅・金剛風・金剛火・金剛大惡の真言〕

金剛歩によって第四のマンダラに至り、金剛鉤等の僕奴を次第に適宜、画くべきである。

そこで、以下の心真言がある。〔金剛鉤・金剛葛羅・金剛頻那夜迦・龍金剛の真言〕

金剛歩によって外輪に至り、母天らを次第に適宜、画け。

すべての金剛門戸にかの門衛を（画け）。

その時、私は適宜、詳細の儀軌を説こう。

まず中央には装飾を施された四角い祭壇が設けられ、仏の影像が入れられる。その時の真言は、一切仏として“sarvavit”とある。この真言が誰を指しているのかは後に改めて検討する。

次にその四方（初重）には、降三世相の金剛手¹⁶を始めとする四大薩埵が画かれる。金剛手以外の尊格は真言の内容から判断されるが、四転輪菩薩であると推察される。

二重には五類天衆の二十天が配置される。初重の金剛手が降三世相をしていることから、大自在天は金剛手の足元にいると考えられ、ここには含まれていない。因みに、現図の金剛界九会曼荼羅では、成身会や降三世会の外金剛部に二十天が画かれているが、実際に二十天を画く記述があるのは、この三世輪マンダラ以降である。

「最初のマンダラ」「第二のマンダラ」という用語については、遍調伏品や一切義成就品にも同様のものがあり、その場合は四方輪を示している¹⁷。このマンダラは輻輪であるため、その輻によって区切られた四方を

指すものであろう。

三重は「母天」と「門衛」とあるのみで、真言も説かれないため尊格の数も明らかではない。「門衛」は四摂菩薩であると考えられるが、「母天」においては最勝曼荼羅王の三摩地においても説かれないため推測の域を脱しない。作例では五類天衆の妃二十尊が画かれている。降三世大曼荼羅儀軌では、五類天衆と合わせてその妃も灌頂を受けることから、適所であると考えられる。しかし、ここで五類天衆妃を画いた場合、先の『十八会指帰』にあった「具三十七」という尊数とは大幅に異なってしまう。もし仮にこのマンダラを三十七尊とした場合、残りの母天は八尊ということになる¹⁸。『金剛頂経』において八女尊といえ、八供養菩薩が想起され、可能性としては考えられる。

以上の大マンダラの諸尊を一覧すると次に通りである。

初重 — 影像 金剛手 金剛藏 金剛眼 金剛巧業

二重 — 五類二十天（東：明王 南：忿怒主 西：拏多主 北：際陀 四門：譏那主）

三重 — 母天（二十母天／八母天）四摂菩薩

（2）一切金剛部金剛マンダラの構造

次に二つ目のマンダラの構造について見ていきたい。経典の記述は次の通りである。【§ 1349～§ 1355】

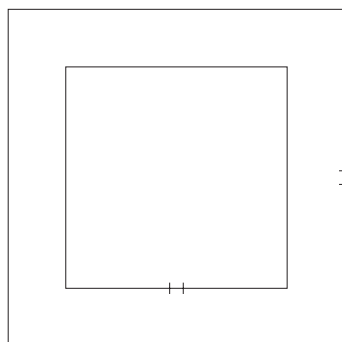
その時、金剛手は再び以下の一切金剛部の金剛マンダラ
[sarvavajrakulavajramaṇḍala]
を説いた。

そこで、最上の金剛マンダラを説こう。

四角 [caturaśra] にして北門のある外輪を線引きせよ。

その内側のところには、同様に東門を（線引きせよ）。

その中央に規則通りに仏の影像を入れよ。



その一切処に降三世等の四（印）を（入れよ）。

同様にマンダラの勝れるところに諸々の金剛印を画け。それらの一切の脇に部の印を画け。

また金剛舜拏等の四門護を（画け）。

ビーマーとシュリーとサラスヴァティーとドゥルガーを左側から諸々の隅に（画け）。外の隅にこれら印を画け。

外輪のところに一切の母天を画け。

このマンダラの名称は「一切金剛部の金剛マンダラ」である。儀軌の名称も同じである。『十八会指帰』では「教勅三昧耶曼荼羅」と呼称されている。

三世輪大マンダラは円形であったのに対して、このマンダラは「四角」である。さらに「内側」「外側」とあることから、二重構造であることが判断される。

三昧耶マンダラは三昧耶形（女性形）で画かれるため、印として画かれることが多い。中央には「仏の影像」があり、その四方には「降三世等の四印」とある。おそらく大マンダラ同様の四転輪菩薩の三昧耶形が画かれるのであろう。初重の四門にも大マンダラ同様の金剛舜拏等が画かれ、二重にはビーマー等が画かれるのは記述の通りである。しかしそれ以外については経典のみでは不明確な点が多くある。

Ānandagarbha の注釈書では尊格とその配置について記されており、作例もそれに基づいて画かれている¹⁹。

（3）一切金剛部法三昧耶マンダラの構造

次に三つ目のマンダラについて見ていきたい。経典の記述は次の通りである。【§ 1386～§ 1388】

その時、金剛手は再び以下の一切金剛部法三昧耶マンダラ
[sarvavajrakuladharmasamayamaṇḍala] を説いた。

そこで、私は大三昧耶マンダラを説こう。三世輪のように
[tricakrasaṃkāśa] すべてのマンダラを画け。

すべての仏と持金剛等が入っている。法マンダラの用法で、胸に標識

を画け。

造壇における名称は「一切金剛部の法三昧耶マンダラ」であり、儀軌の名称も同様である。形状については「三世輪のように」とあることから、大マンダラと同様に同心三重の輻輪マンダラであると考えられる。

造壇に関する記述は四種のマンダラの中では最も少なく、注釈書に頼らざるを得ないマンダラである。作例では大マンダラと類似した形状であることが確認されている。

(4) 一切金剛部羯磨マンダラの構造

最後に四つ目のマンダラについて見ていく。経典の記述は次の通りである。【§ 1438～§ 1444】

その時、金剛手はまた以下の一切金剛部の羯磨マンダラ
[sarvavajrakukakarmamaṇḍala] を説いた。

そこで、私は最上の羯磨マンダラを説こう。

金剛マンダラの用法 [vajramaṇḍalayoga] で、すべてのマンダラを
線引きせよ。

すべての勝れたマンダラは中央に仏が住する。

それらの脇に列する大薩埵たちを入れよ。

その中央に妻を伴う金剛最上明菩薩自身を（画け）。

金剛嬉等の秘密舞供養によって敬礼せしめよ。

そこに母天などを次第に輪マンダラの用法 [cakramaṇḍalayoga] で、
自印と各々の印をもって舞しつつあるよう画け。

仏と金剛女を供養するために金剛舞の用法で、諸隅と諸門に次第に香
などを画け。

マンダラの名称は「一切金剛部の羯磨マンダラ」である。形状は「金剛マンダラの用法」とあることから、二つ目の「一切金剛部の金剛マンダラ」同様の二重四方構造のマンダラではないかと考えられる。作例は金剛マンダラと類似した形状である。

各印は「輪マンダラの用法」を用いて画くとあることから、尊格はそれ

ぞれ円輪の中に図絵されることになる²⁰。

また、羯磨マンダラの図絵段には中尊に関する記述がある。和訳のみでは誤解があるため、網掛け箇所について以下に原文を載せる。

maṇḍalāgrāṇi sarvāṇi buddhamadhyasthitāni hi,
teṣāṃ pārśveṣu paṅktyā vai mahāsattvān niveśayet.
tasya madhye sapatnīkaṃ vajravidyottamaṃ svayam.

妻を伴う金剛最上明菩薩の位置について、「その中央」と示す所が“tasya”と単数であることから、“mahāsattva”ではなく、“buddhamadhyā”即ちマンダラの中央であると考えられる。作例においても、羯磨マンダラの中央には金剛最上明菩薩が明妃を伴って画かれている。その四方に大薩埵が位置している。

3、マンダラの中尊について

(1) 大マンダラの中尊について

次にここまで見てきたマンダラの中尊について考察していきたい。先述の通り、羯磨マンダラの中尊は金剛最上明菩薩、即ち大自在天である。つまり『金剛頂経』とは言え、中尊が毘盧遮那如来ではない場合があると考えられる。

大マンダラの図絵段では、中央には影像を入れ、真言には“sarvavit”とあった。乾仁志氏によれば、『悪趣清浄軌』に「一切知毘盧遮那」が現れることを指摘しており、また Ānandagarbha も「中央は毘盧遮那」と明記し²¹、作例もそれに則り中央には毘盧遮那如来が画かれている。

これらを見る限り、大マンダラの中尊は毘盧遮那如来であるように見受けられる。しかしここで、最初に触れた「最勝曼荼羅王の三摩地」の(五)菩薩の真言について、今一度、詳しく見ておきたい。【§ 1228～§ 1233】

- ① その時、金剛手菩薩大士は以下の「自身の最上の明呪
[svavidyottama]」を説いた。

“oṃ nisumbha vajra hūṃ phaṭ.”

- ②そこで再び金剛手は自心〔svahr̥daya〕から以下の「心真言〔hr̥daya〕」を説いた。

“om ṭakki jjaḥ.”

- ③その時、金剛蔵菩薩大士は以下の「自身の最上の明呪〔svavidyottama〕」を言った。

“om vajraratnottama jvālaya hūṃ phaṭ.”

- ④その時、金剛眼菩薩大士は以下の「自身の最上の明呪〔svavidyottama〕」を言った。

“om svabhāvaśuddhavajrapadma śodhaya sarvān vidyottama hūṃ phaṭ.”

- ⑤その時、金剛巧業菩薩大士は以下の「自身の最上の明呪〔svavidyottama〕」を言った。

“om vajrakarmottama vajradhara samayaṃ anusmara śumbha niśunbha” ākarṣaya praveśay’ āveśaya bandhaya samayaṃ grāhaya sarvakarmāṇi me kuru mahāsattva hūṃ phaṭ.”

- ⑥その時、金剛最上明菩薩大士は世尊金剛手の御足を頂礼しながら、以下の「自身の心真言〔svahr̥daya〕」を出だした。

“om vajrakarmottama vajradhara samayaṃ anusmara sumbha nisumbha ākarṣaya praveśaya āveśaya bandhaya samayaṃ grāhaya sarvakarmāṇi me kuru mahāsattva hūṃ phaṭ.”

『初会金剛頂経』において図絵段の前に諸尊の真言を説く儀軌は、三世輪四種の曼荼羅儀軌の他に、遍調伏品や一切義成就品も同様ある。そのいずれの儀軌においても四転輪菩薩の真言が説かれている。遍調伏品では〈世尊・金剛手・金剛蔵・金剛眼・金剛巧業〉、一切義成就品では〈世尊毘盧遮那・金剛手・金剛蔵・金剛眼・金剛巧業〉の真言が説かれる。因みに両者とも、中尊は毘盧遮那如来である。

三世輪大曼荼羅儀軌では世尊が真言を説かず、金剛手が「明呪」と「心真言」の二つの真言を説く。加えて最後に金剛最上明菩薩が真言を説くことも特徴的な点である。

この図絵前の真言は「出生段」と捉えられることがある²²。事実、真言の最後が四摂菩薩となっていることから、これを出生と捉えることは充分

可能である。では、これらの真言を出生段と捉えた場合、世尊ではなく、金剛手が二度、真言を説いていることはどのように解釈するべきであろうか。

この箇所を見る限りでは、おそらく金剛手が中央と東方の二ヶ所にいるものと考えられる。図絵段において降三世相をした金剛手が東に住することから、⑥の金剛最上明菩薩は同じく東方にいるものと考えられる。また①と②の真言を見ると、①が降三世の真言である。そのことから推測すれば、①が東方の金剛手であり、その足元に金剛最上明菩薩がいるのではないかと考えられる。即ち、①③④⑤が四方の四転輪菩薩である。いずれも「自身の最上の明呪 (svavidyottma)」という共通点もある。つまり中央の影像是、②の金剛手ではないかと推測される。

尤も注釈書、作例ともに大マンダラの中尊は毘盧遮那如来としていることは確かである。以上の仮説には推論が多分に含まれているが、經典の意図しているところは、必ずしも中尊が毘盧遮那如来とは限らないのではないかと可能性を示しておきたい。

(2) 各マンダラの中尊に関する推測

大マンダラの中尊に関して、必ずしも毘盧遮那如来であるとは限定されず、金剛手とも考えられることは先に示した通りである。また一切金剛部羯磨マンダラの中尊は、金剛最上明菩薩である可能性が極めて高い。では、一切金剛部金剛マンダラと一切金剛部法三昧耶マンダラの中尊はどうだろうか。

図絵段では、金剛マンダラの中央には仏の影像を入れ、法三昧耶マンダラにおいては中尊に関する記述がない。これらの作例、及び注釈書では、いずれの中尊も毘盧遮那如来である。

そこで図絵段前の真言を見てみたい。一切金剛部金剛マンダラでは次の通りである。【§ 1333～§ 1338】

- ①その時、世尊は再び一切如来の金剛陀羅尼三昧耶より生ずる加持と名付ける三摩地に入り、以下の自身の最上の明呪を説いた。

oṃ vajrasāvitre svāhā.

- ②その時、金剛手大菩薩は再び以下の自身の最上の明呪を説いた。

oṃ vajradhāri hūṃ vajravikrame phaṭ.

- ③その時、金剛藏菩薩大士は以下の自身の最上の明呪を説いた。

oṃ vajraratnagotre svāhā.

- ④その時、金剛眼菩薩大士は以下の自身の最上の明呪を説いた。

oṃ vajrapadmanetre hūṃ phaṭ.

- ⑤その時、金剛巧業菩薩大士は以下の自身の最上の明呪を説いた。

oṃ vajrakarmakari hūṃ.

- ⑥その時、金剛最上明菩薩は以下の自身の最上の明呪を説いた。

oṃ vajrasūlāgre svāhā.

金剛マンドラでは、大マンドラとは異なり〈世尊・金剛手〉の順に真言が明かされている。①世尊の真言の内容には“sāvitrī”が説かれている。“Sāvitrī”とは「太陽」のことで、毘盧遮那如来を彷彿させる。しかし Veda において“Sāvitrī”とは、Brahman の妻であり、Sūryā（太陽の女神）と同体とされている神の名前でもある。尤もこの根拠のみで、中尊が Savitrī とすることは甚だ早計であるが、留意すべき点であるとしたい。

次に一切金剛部法三昧耶マンドラの中尊について、同じく図絵段前の真言を見てみる。【§ 1375～§ 1380】

- ①その時、世尊は再び一切如来の法三昧耶より生ずる金剛加持と名づく三摩地に入り、以下の自身の最上の明呪を説いた。

oṃ vajravīt.

- ②その時、金剛手は再び以下の自身の法三昧耶を説いた。

oṃ hana hana hūṃ phaṭ.

- ③その時、金剛藏は再び以下の自身の法三昧耶を説いた。

oṃ hara hara hūṃ phaṭ.

- ④その時、金剛眼は自身の法三昧耶を説いた。

oṃ mara mara hūṃ phaṭ.

- ⑤その時、金剛巧業は自身の法三昧耶を説いた。

oṃ kuru kuru hūṃ phaṭ.

- ⑥その時金剛最上明は自身の法三昧耶を説いた。

oṃ hūṃ hūṃ phaṭ.

①世尊の真言では“vajravit”（金剛知）とある。これは大マンダラ図絵段における中尊の真言“sarvavit”に合わせた真言であると思われる。大マンダラの中尊は金剛手ではないかとしたが、この真言ではより金剛手を連想させるものである。

以上、中尊に焦点を当て検討してきた。結論として、三世輪のマンダラ中尊は、必ずしも毘盧遮那如来と限らないのではないかと考えられる。

4、形状について

次に三世輪マンダラの形状について考察していきたい。ここまで見てきたように、大マンダラと法三昧耶マンダラは円形、金剛マンダラと羯磨マンダラは四方形をしている。

円形のマンダラは、『初会金剛頂経』の中ではこの二つしか説かれていない。円形のマンダラ自体は『初会金剛頂経』以前にも『不空罽索神変真言経』²³等に説かれているが、輻輪マンダラは見当たらない。輻輪マンダラについて酒井眞典氏によれば、『理趣広経』『降三世儀軌』『悪趣清浄軌』等が挙げられている²⁴。しかし、これらはいずれも八輻輪マンダラとして整理されているものであり、このことから経典の成立順序が伺える。

一方で、金剛マンダラと羯磨マンダラの四方形は多重構造である点など、『金剛頂経』より『大日経』に近いように思える。

ではそもそも何故、同じ経典、同じ章でありながらも、円形と四方形という異なる形状のマンダラが説かれるのであろうか。

儀軌の内容を見る限り、いずれの灌頂儀礼も特異ではあるが、マンダラの形状に影響を及ぼすものとは考えにくい。悉地智も同様である。考えられることとして、大マンダラと法三昧耶マンダラの儀軌は男性形、金剛マンダラと羯磨マンダラの儀軌は女性形によって説かれているという点である。つまり円形のマンダラの儀軌は男性形で説かれ、四方形のマンダラの儀軌は女性形で説かれているということである。但し他の四大品も大マンダラと法マンダラは男性形、三昧耶（金剛）マンダラと羯磨マンダラは女性形によって説かれているが、マンダラの形状に違いは見られない。そのため、三世輪のみ儀軌の性がマンダラの形状に影響する説明がつかない。

他の要因として考えられるのは、先に考察したマンダラの中尊である。

仮説に従えば、大マンダラと法三昧耶マンダラは金剛手菩薩、金剛マンダラは Sāvitrī (太陽女神)、羯磨マンダラは金剛最上明菩薩 (大自在天) が中尊である。金剛手が中尊であれば円形のマンダラ、天部の諸尊が中尊であれば四方形ということになる。

多分に仮説が含まれるが、次のようにまとめられる。

	形状	儀軌の性	中尊
大	○	男性	金剛手
三昧耶	□	女性	サーヴィトリ
法	○	男性	金剛手
羯磨	□	女性	金剛最上明 (大自在天)

5、結び ～一切金剛部の意義～

ここまで見てきたように、四種の三世輪マンダラは、形状・マンダラを構成する諸尊が極めて特異であることが理解される。何故、このようなマンダラが『初会金剛頂経』に説かれているのか、最後に見ていきたい。

三世輪マンダラを構成する諸尊は、降三世大マンダラ儀軌において降伏・灌頂されている天部の神々である。しかし、それらの諸天は降三世大マンダラ中に画かれることはない。そのため、『十八会指帰』にあるように「外金剛部衆の為」に三世輪のマンダラが設けられたことがまず以て考えられる。

さらに三世輪の灌頂儀礼には投華得仏が説かれている。実は『初会金剛頂経』において投華得仏を明記している儀軌は、金剛界大マンダラとこの三世輪の儀軌のみである。尤も他の儀軌では省略されているのみであるかもしれないが、少なくとも三世輪のマンダラでは投華得仏が行われる。しかし、粗、諸天によって構成されている三世輪マンダラを用いて、果たして仏教徒が投華得仏を行っていたのかは疑問である。

そもそも降三世品における降伏対象が大自在天、すなわちシヴァ神である要因として考えられるは、『初会金剛頂経』の成立時期と、シヴァ教を始めとするヒンドゥータントリズムの成立時期が重なっていたことがあげられる²⁵。そのためシヴァ教などへの対抗意識と仏教の優位性を示すこと

こそが降三世品の最大のテーマであったと考えられる。しかし一方で、三世輪のように諸天をマンダラに引き入れ、さらには投華得仏を行うということを加味すると、他宗教の神々を降伏するのみではなく、それを信仰する人を仏教に改宗させる目的が含まれていると推測される。

言い換えれば、『初会金剛頂経』の四大品・六曼荼羅の規則性を異にするほど、当時の他宗教が勢力的であったことが伺い知ることができるものである。そのために形状も影響を受け、特異なものになったのではないかと考えられる。

(大正大学大学院博士後期課程)

¹ Sarvatathāgatatattvasaṃgrahaṃ nāma mahāyānasūtram.

テキストとして堀内寛仁『初会金剛頂経の研究 梵本校訂篇（上）』（密教文化研究所、1983）（以下、「§」）を使用。

² 『大正蔵』18, No869.

³ 田中公明『インドチベット曼荼羅の研究』（法蔵館、1987）、「ペンコルチューデー仏塔と『初会金剛頂経』所説28種曼荼羅」（『密教図像』6、1988）
森雅秀「ペンコルチューデー仏塔第五層の『金剛頂経』所説のマンダラ」（『国立民族博物館研究報告』別冊、1977）

⁴ Ānandagarbha; Sarvatathāgatatattvasaṃgrahamahāyānābhisamaya-nāma tantravyākhyātattvāloka-kārī. (東北 No.2510. 大谷 No.3333.)

⁵ 降三世品：Sarvatathāgatavajrasamaya nāma mahākara-parājaḥ（「一切金剛三昧耶の大儀軌王」）

⁶ 『初会金剛頂経』において、四印マンダラと一印マンダラは一つの儀軌の中に説かれる。そのため、降三世品は九儀軌十曼荼羅を説く。

⁷ 一印マンダラのこと。

⁸ 『大正蔵』18, pp285a～285.

⁹ いずれも儀軌の最後に説かれている題には“sarvatathāgatavajrasamayān mahākālpa-rājāt”とある。

¹⁰ § 661～.

¹¹ § 745～§ 747.

¹² 金剛最上明菩薩 § 1233.

atha Vajravidyottamo bodhisattvo mahāsattva idaṃ svahrdayaṃ bhagavato vajrapāṇeḥ pādavandanīyaṃ niyātayāṃ āsa //

忿怒金剛明 § 1234.

atha Krodhavajro vidyārājo bhagavataś caraṇayor nipatyedaṃ svahrdayam
adāt //

- ¹³ 「三世」について、拙稿『『金剛頂経』降三世品における降三世と明王について』（『智山学报』62輯、2013）。
- ¹⁴ 拙稿「三世輪曼荼羅儀軌について」（『智山学报』63輯、2014）
- ¹⁵ 「二倍の線」について。他經典のマンダラ造壇にもしばしば見られる表現であるが、この文には二倍の基準となる長さが記されていない。カディラ樹であると推測し、補った。
- ¹⁶ 降三世大曼荼羅儀軌にあるように、大自在天と烏摩妃を降伏している相を指す。
- ¹⁷ 遍調伏品の大マンダラ・三昧耶マンダラ、一切義成就品の三昧耶マンダラの図絵段にある。
- ¹⁸ 5尊（中央・四転輪）と20尊（五類天衆）と4尊（四摂）を足すと29尊になる。
- ¹⁹ 東北 li339b ～。
作例の諸尊については、上掲の森雅秀（1977）に詳しい。
- ²⁰ 酒井眞典『酒井眞典著作全集 金剛頂経研究』第三卷（法蔵館、1985）「八輻輪曼荼羅」によれば、輻輪マンダラの尊格は円輪の内に画かれている。
- ²¹ 東北 li328b5 ～。
乾仁志「『初会金剛頂経』所説のマンダラ（後）」（『高野山大学密教文化研究所紀要』
- ²² 上掲、乾氏同論文。
- ²³ 『大正蔵』20, No.1092.
- ²⁴ 酒井氏同書。
- ²⁵ 『金剛頂経』の成立時期には諸説あるが、南インドの七世紀とするのが有力である。シヴァ教主流の聖典シヴァ派は、南インドの七世紀の成立である。（早島鏡正・高崎直道・原実・前田専学『インド思想史』（東京大学出版会、1982））